

# 確率・統計 A

若木宏文

wakaki@math.sci.hiroshima-u.ac.jp

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/wakaki/lecture/index.shtml>

2015.6.2

# 目次

- 平均と特性量
  - 平均の定義
  - 基本的性質



## 3.1. 平均の定義

# 離散型確率変数の平均

## 定義 3.1

確率変数  $X$  は離散型で、その確率関数を  $f(x)$  とする。

$X$  のとりうる値が有限個で、取り得る値の集合が  $D = \{x_1, \dots, x_n\}$  の場合

$$E(X) = \sum_{j=1}^n x_j P(X = x_j) = \sum_{j=1}^n x_j f(x_j)$$

を  $X$  の平均, あるいは期待値という。

とりうる値の集合が可算集合  $D = \{x_1, x_2, \dots\}$  の場合には、級数

$$E(X) = \sum_{j=1}^{\infty} x_j P(X = x_j) = \sum_{j=1}^{\infty} x_j f(x_j)$$

が絶対収束するとき、 $X$  の平均は存在するといひ、その極限値を  $X$  の平均, あるいは期待値という。

## 連続型確率変数の平均

### 定義 3.2

確率変数  $X$  は連続型で, その確率密度関数を  $f(x)$  とする.

$$\int_{-\infty}^{\infty} |x|f(x)dx < \infty$$

であるとき,  $X$  の平均は存在するといひ,

$$E(X) = \int_{-\infty}^{\infty} xf(x)dx$$

を  $X$  の平均, あるいは期待値という.

## 平均の例

### 例 3.1

(1)  $X \sim B(1, p)$  のとき,  $E(X) = p$

(2)  $X \sim B(n, p)$  のとき,  $E(X) = np$

### 例 3.2

(1)  $X \sim U(a, b]$  のとき,  $E(X) = \frac{b-a}{2}$

(2)  $X \sim N(\mu, \sigma^2)$  のとき,  $E(X) = \mu$ .

(証明は板書で)

## 3.2. 基本的性質

## 確率変数の関数の期待値

### 定理 3.1

確率変数  $X$  が離散型のとき、 $X$  のとりうる値を  $x_j, j = 1, 2, \dots$  とし、確率関数を  $f(x_j)$  とする。また、 $X$  が連続型のとき、その確率密度関数を  $f(x)$  とする。このとき

$$E\{g(X)\} = \begin{cases} \sum_{j=1}^{\infty} g(x_j)f(x_j), & X \text{ が離散型のとき} \\ \int_{-\infty}^{\infty} g(x)f(x)dx, & X \text{ が連続型のとき} \end{cases}$$

である。

(証明 (離散型の場合) は板書で)

### 注 3.3

この定理は、 $g(X)$  の平均は本来  $g(X)$  の分布から求められるべきであるが、 $X$  の分布から求められることを述べている。

### 例 3.3

$X$  は一様分布  $U(0, 1]$  に従うとする。このとき、 $Y = X^2$  の平均を考えよう。定理 3.1 を利用すると

$$E(X^2) = \int_0^1 x^2 \cdot 1 dx = \frac{1}{3}$$

となる。

一方、 $Y$  の分布関数は  $0 \leq y \leq 1$  のとき

$$F_Y(y) = P(Y \leq y) = P(X \leq \sqrt{y}) = \sqrt{y}$$

であるから、 $Y$  の確率密度関数は

$$f_Y(y) = \begin{cases} \frac{1}{2} y^{-1/2}, & 0 < y \leq 1 \text{ のとき} \\ 0, & \text{その他のとき} \end{cases}$$

となるので

$$E(Y) = \int_0^1 y \cdot \frac{1}{2} y^{-1/2} dy = \frac{1}{3}$$

## 例 3.4

$X$  : 連続型,  $f(x)$  : 確率密度関数,  $F(x)$  : 分布関数

$g$  : 微分可能な狭義の単調減少関数,

$$a = \inf\{g(X(\omega)); \omega \in \Omega\}, \quad b = \sup\{g(X(\omega)); \omega \in \Omega\}$$

$a < y < b$  のとき

$$F_Y(y) = P(g(X) \leq y) = P(X \geq g^{-1}(y)) = 1 - F(g^{-1}(y))$$

$$\frac{d}{dy} F_Y(y) = -\frac{dg^{-1}(y)}{dy} f(g^{-1}(y)) = \left| \frac{dg^{-1}(y)}{dy} \right| f(g^{-1}(y))$$

$$E(Y) = \int_a^b y \left| \frac{dg^{-1}(y)}{dy} \right| f(g^{-1}(y)) dy$$

$x = g^{-1}(y)$  と変数変換すると

$$E(Y) = \int_{-\infty}^{\infty} g(x) f(x) dx$$

となる. ( $x > g^{-1}(a)$  または  $x < g^{-1}(b)$  で  $f(x) = 0$ )

## 多変量の場合

### 定理 3.2

$n$ 次元確率ベクトル  $\mathbf{X}$  が離散型のとき, そのとりうる値を  $x_1, x_2, \dots$  とし確率関数を  $f(x_j)$  とする. また,  $\mathbf{X}$  が連続型のとき, その確率密度関数を  $f(x)$  とする. このとき

$$E(g(\mathbf{X})) = \begin{cases} \sum_{j=1}^{\infty} g(x_j)f(x_j), & x \text{ が離散型のとき} \\ \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} g(x)f(x)dx, & x \text{ が連続型のとき} \end{cases}$$

である.

(離散型の場合の証明は板書で)

## 定理 3.2, 連続型の例

### 定理 3.3

$n$  次元確率ベクトル  $\mathbf{X}$  は連続型で, 確率密度関数  $f(x_1, \dots, x_n)$  をもつとする. また,  $\mathbf{X}$  のとりうる値は領域  $\mathcal{X} = \{\mathbf{x}; f(\mathbf{x}) > 0\} \subset \mathbb{R}^n$  であるとする.  $\mathbf{x} = (x_1, \dots, x_n)'$  から  $\mathbf{y} = (y_1, \dots, y_n)'$  への変換

$$\begin{cases} y_1 = u_1(\mathbf{x}) = u_1(x_1, \dots, x_n) \\ \vdots \\ y_n = u_n(\mathbf{x}) = u_n(x_1, \dots, x_n) \end{cases}$$

は領域  $\mathcal{X}$  を領域  $\mathcal{Y}$  に写し, 次の性質 (1) ~ (3) をみたすとする.

- (1) 1-1 である.
- (2) 逆変換

$$\mathbf{y} \rightarrow \mathbf{x}: \quad x_i = v_i(\mathbf{y}) = v_i(y_1, \dots, y_n), \quad i = 1, \dots, n$$

は  $C^1$  クラスである.

## 定理 3.3 (続き)

## (3) ヤコビ行列式

$$J = \begin{vmatrix} \frac{\partial x_1}{\partial y_1} & \cdots & \frac{\partial x_1}{\partial y_n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial x_n}{\partial y_1} & \cdots & \frac{\partial x_n}{\partial y_n} \end{vmatrix}$$

の値が任意の  $\mathbf{y} \in \mathcal{Y}$  に対してゼロでない。

この変換により定義される確率変数を

$$Y_i = u_i(\mathbf{X}) = u_i(X_1, \dots, X_n), \quad i = 1, \dots, n$$

とする。このとき、 $\mathbf{Y} = (Y_1, \dots, Y_n)'$  の確率密度関数は

$$h(y_1, \dots, y_n) = \begin{cases} f(v_1(\mathbf{y}), \dots, v_n(\mathbf{y}))|J|, & \mathbf{y} \in \mathcal{Y} \\ 0, & \mathbf{y} \in \mathcal{Y}^c \end{cases}$$

となる。

## 定理 3.3 の証明

$\mathbf{Y} = (Y_1, \dots, Y_n)'$  の分布関数は

$$\begin{aligned} F_{Y_1, \dots, Y_n}(a_1, \dots, a_n) &= P(Y_1 \leq a_1, \dots, Y_n \leq a_n) \\ &= P(u_1(\mathbf{x}) \leq a_1, \dots, u_n(\mathbf{x}) \leq a_n) \end{aligned}$$

と表せる.  $D_{\mathbf{a}} = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n; u_i(\mathbf{x}) \leq a_i, i = 1, \dots, n\}$  とおく. 変数変換  $y_i = u_i(\mathbf{x}), i = 1, \dots, n$  を考えることによって

$$\begin{aligned} F_{Y_1, \dots, Y_n}(a_1, \dots, a_n) &= \int \cdots \int_{D_{\mathbf{a}}} f(x_1, \dots, x_n) dx_1 \cdots dx_n \\ &= \int_{-\infty}^{a_1} \cdots \int_{-\infty}^{a_n} h(y_1, \dots, y_n) dy_1 \cdots dy_n \end{aligned}$$

を得る.



## 定理 3.2 の証明 (連続型)

$$Y = Y_1 = u_1(X_1, \dots, X_n) = g(X_1, \dots, X_n)$$

とし, (1)~(3) が成り立つような関数  $u_2(\mathbf{x}), \dots, u_n(\mathbf{x})$  がとれる場合.  
 $Y = Y_1$  の確率密度関数は

$$h_1(y_1) = \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} h(y_1, \dots, y_n) dy_2 \cdots dy_n$$

で与えられ, 変数変換  $y_i = u_i(\mathbf{x}), i = 1, \dots, n$  を考えることによって

$$\begin{aligned} E(Y_1) &= \int_{-\infty}^{\infty} y_1 h_1(y_1) dy_1 = \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} y_1 h(y_1, \dots, y_n) dy_1 \cdots dy_n \\ &= \int_{-\infty}^{\infty} \cdots \int_{-\infty}^{\infty} g(\mathbf{x}) f(\mathbf{x}) d\mathbf{x}. \quad \square \end{aligned}$$

## 例

$X_1, X_2$  は独立で,  $X_1 \sim N(2, 1)$ ,  $X_2 \sim N(1, 1)$

(1)  $Y_1 = X_1 + X_2$ ,  $Y_2 = X_1 - X_2$  とすると

$$\begin{pmatrix} Y_1 \\ Y_2 \end{pmatrix} \sim N_2(\boldsymbol{\mu}, \Sigma), \quad \boldsymbol{\mu} = \begin{pmatrix} 3 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \Sigma = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}$$

(2)  $E(X_1 + X_2) = 3$

(証明は板書で)

# 平均の線形性と単調性, 独立な確率変数の積の平均

## 定理 3.4

確率変数  $X, Y$  は平均をもつとする.

- (1) 任意の定数  $a$  に対して,  $E(aX) = aE(X)$ .
- (2)  $E(X + Y) = E(X) + E(Y)$ .
- (3)  $X \leq Y \Rightarrow E(X) \leq E(Y)$ .

(証明は板書で)

## 定理 3.5

確率変数  $X, Y$  は平均をもち, 独立とする. このとき

$$E(XY) = E(X)E(Y).$$

(証明は板書で)

### 注 3.5

$g, h$  を  $\mathbb{R}$  上の任意のボレル関数とする. 定理 3.2 を用いると定理 3.5 と同様に  $X, Y$  が独立ならば

$$E\{g(X)h(Y)\} = E\{g(X)\}E\{h(Y)\} \quad (1)$$

を示すことができる. 逆に, 任意のボレル関数  $g, h$  に対して (1) が成り立つならば,  $g, h$  をそれぞれ, 区間  $J_a = (a_1, a_2]$ ,  $J_b = (b_1, b_2]$  の定義関数ととることにより

$P(X \in J_a, Y \in J_b) = E\{I_{(a_1, a_2]}(X)I_{(b_1, b_2]}(Y)\} = P(X \in J_a)P(Y \in J_b)$  が導かれるので,  $X, Y$  は独立である. ここで, 一般に集合  $S$  の部分集合  $A$  に対して,  $A$  の定義関数とは

$$I_A(s) = \begin{cases} 1, & s \in A \\ 0, & s \notin A \end{cases}$$

と定義される  $S$  上の関数を意味する.